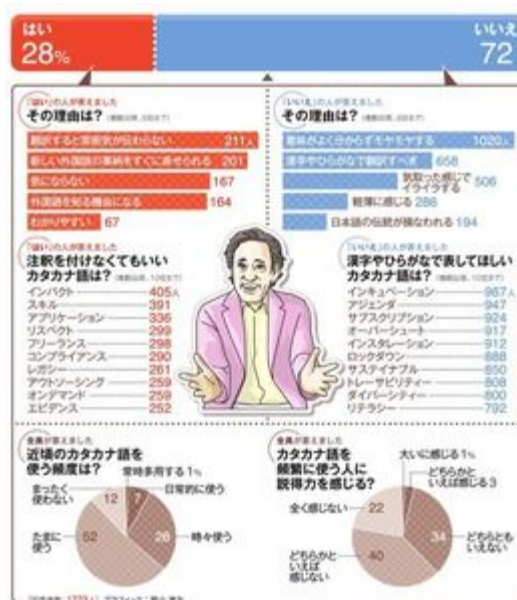


(be between 読者とつくる)近頃のカタカナ語は許容できる？

有料記事

2020年5月2日 3時30分



近頃のカタカナ語は許容できる？<グラフィック：岡山進矢>

を圧倒した。回答者を世代別で見ると、50代以上が全体の87%を占めた。コロナ禍に関連するカタカナ語の使用に批判的な姿勢もうかがえ、「地球規模の非常時に国民全員に自粛を求めるのであれば、誰もが理解できる平易な言葉を使うべきだ」（香川、51歳男性）、「内容の理解は高齢者ほど必要。分かってもらう気があるのか」（大阪、74歳男性）。「もう少し分かりやすく日本語で言えばいい」と注文を付けた河野太郎防衛相に賛同する人も少なくなかった。

オーバーシュートは、その代表例だろう。朝日新聞の過去の記事を検索すると、コロナ禍の報道までは、多くが為替相場などについて「景気の実態から外れた行き過ぎ」といった意味の

オーバーシュート、ロックダウン、クラスター。新型コロナウイルスの感染拡大の防止に向けて、政府や専門家らが国民に外出の自粛を求める際に口にしてきた外来のカタカナ語です。それぞれ「爆発的な患者増加」「都市封鎖」「感染者の集団」の意味とされますが、そんな近頃のカタカナ語の評判はどれも芳しくありません。

↓ここから続き

■自粛を求めるのなら

主に平成・令和期によく見聞きするカタカナ語を許容できるか、読者に尋ねたところ、回答者の72%が「いいえ」（拒絶派）と答え、「はい」（許容派）の28%

経済用語として使われてきた。拒絶派には「政府のセンスのなさの表れ」（東京、52歳女性）と答えた人もいた。

そもそもカタカナ語の中には、官僚や政治家が国民をけむに巻き、専門家や報道機関が翻訳の努めを怠った言葉があると疑念をもつ拒絶派も。「不都合な真実を伝えたい意図を感じる」（茨城、73歳男性）、「人によって理解が異なるので、都合が悪くなれば言い逃れをするのに便利」（群馬、66歳男性）。

一方の許容派。「日本語で『感染症の大流行』と言うよりも、パンデミックのように一言で危機感が伝わりやすいカタカナ語もある」（神奈川、48歳女性）。40代以下の回答者は全体の13%と少数だったが、許容派の割合は39%と全世代の割合よりも高かった。「言葉を正確な意味で使うためには、カタカナ語にしてそのまま伝えることも必要。漢字ばかりだと硬い雰囲気になって意味が通じにくいこともある」（岐阜、13歳男性）と、翻訳による弊害を指摘する声が続いた。

カタカナ語の役割を重視する高齢の許容派もいる。「技術の進歩、生活の変化、情報の国際化など、世の中の変化に対応するためにカタカナ語をうまく採り入れることは良い」（東京、89歳男性）

カタカナ語の是非は今に始まった話ではない。

例えば1936年の東京朝日新聞紙上での論争。「『いき』の構造」を著した哲学者の九鬼周造は拒絶派の立場から「『ベースボール』は『野球』に完全に駆逐されてしまった」と翻訳語を評価。「新しい言語内容に関して外国語をそのまま用いればなるほど一番世話はない。好奇心を満足させることも事実」とカタカナ語に一定の理解を示しつつも「それでは余りにも自国語に対する愛と民族的義務とに欠けている」と主張した。これに対し、国文学研究家の村上成実は許容派の立場から生活での実用性を重視し、「ミシンという一つの語がある。これを漢字で翻訳して縫衣器といい、自動運針機という、いずれが果たして今日の国語の純をさまたげるであろうか？ 殊にミシンでもサービスでもドライブでも、（中略）しかく転訛（てんか）して日本語になっている」と反論した。

読者アンケートの許容派の一人は言う。「微妙なニュアンスが加わって表現しやすければ定着するし、ピッタリな訳語があれば次第に使われなくなるだろう」（神奈川、65歳女性）。続々と生まれるカタカナ語も、そんな理由で淘汰（とうた）されていくのかもしれない。

（辻岡大助）

*

beモニターへのアンケートをもとにした企画です。モニターの登録はいつでもできます。
<http://t.asahi.com/bemail> から入ってください。